牧野富太郎が歩いた「国有林」

林野庁
四国森林管理局

植物学者・牧野富太郎博士。博士が７２歳の昭和９年８月に、高知営林局※1に招かれ、魚梁瀬（現・高知県馬路村）や白髪山（現・高知県本山町）において、営林局職員に対し、植物の採集指導を行いました。

「高知林友」※2に、牧野博士と行動を共にした当時の職員が記録を残していました。

牧野博士の行程

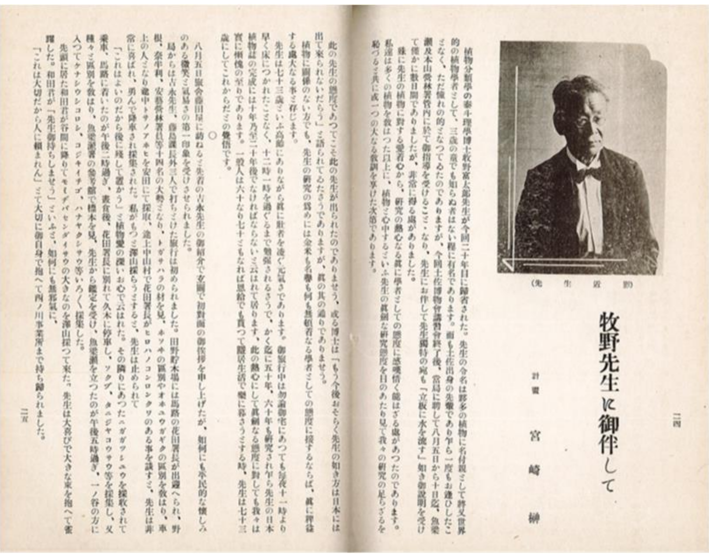
昭和９年８月

- ５日　高知発、田野貯木場を経由し、魚梁瀬営林署管内の西川事業所泊
- ６日　千本山保護林で指導調査、魚梁瀬営林署管内の石仙泊
- ７日　午前、石仙で採集・鑑定の上、午後高知へ
- ８日　高知から本山を経由し、本山営林署管内の白髪山作業所泊
- ９日　白髪山国有林で指導調査し、本山町泊
- 10日　帰全山の植物調査を行い、高知に戻る

高知林友　第171号「植物学界の権威　牧野博士の指導日程」より

「高知林友」が伝える牧野博士の様子

自らを「植物の精」と呼んだ博士像そのままに、植物の採集や指導にあたったり、植物を愛する様子が克明に書かれており、職員が牧野博士から感銘を受けた様子が伝わってきます。



牧野先生に御伴して

宮崎　榊

高知林友　第172号（昭和９年10月）

> 殊に先生の植物に対する愛着心から、研究の熱心なる真に学者としての態度に感嘆惜く能はざる処があったのであります。私たちは多くの植物を教わった以上に、植物と心中するという先生の真剣な研究態度を目の当たり見て我々の研究の足らざるを恥じるとともに或一つの大なる教訓を享けた次第であります。

> それから尚敬服させられたのは先生の植物に対する愛護の態度で、先生は一本一草、一葉一茎と雖も決して無意味に損ぜないのであります。総て研究の為めの採集であるこの御考を常に持たれている点がありありとうかがわれることであります。又其の珍奇な物は決して絶やさないように保存されるという御心掛を常に持たれていることであります。

高知林友　第172号「牧野博士にお伴して」より

> “流石は植物界の泰斗だナー”の感念にみんなの顔には緊張の色が読まれた。其の偉大な権威者に接し、其の熱心さに驚異した。そして真の学者の如何なるものかを我々の脳裡に深く印象付けられ、植物研究以外に何かを我々に与えて下さったことを痛感した。

高知林友　第172号　「森林主事講習生の実習日誌　第二信」より

林業遺産「大正・昭和初期の林業関係写真」

四国森林管理局には、大正～昭和初期の林業関係の写真帳が保存されており、当時の林業活動の様子をうかがい知ることができます。牧野博士が訪れた際に撮られた写真ではありません（博士訪問の10～20年程度前の様子と推定。）が、牧野博士が訪れたとされる場所の写真も残されています。本誌では、この林業遺産の写真とともに、博士の行程をご紹介します。

千本山保護林
（現・高知県馬路村）

白髪山保護林
（現・高知県本山町）

※1　高知営林局：現在の四国森林管理局の前身となる組織で、四国４県の国有林を管理・経営していました。

※2　「高知林友」：大正３年７月に職員の会費制度による高知林友会が発足しました。毎月１回「高知林友」誌を発行し、職員相互の意志疎通・和調協調・信頼感を深めるとともに、殊に、林業技術面の発表機関的性格をもって出発したものとされています。

【参考文献】高知営林局史（1972）、高知林友第171号（昭和９年９月号）、第172号（昭和９年10月号）　旧字体は新字体に、旧仮名遣いは現代仮名遣いにしております。

牧野富太郎が歩いた「国有林」～魚梁瀬編～

牧野富太郎博士は昭和９年８月５日から７日まで、魚梁瀬営林署※1管内で植物の採取指導を行い、「田野貯木場」や「千本山保護林」などを訪問しました。「高知林友」には、魚梁瀬営林署の事業所に宿泊し、夕食を済ますと直ちに標本づくり（腊葉）をしながら、職員の質問に丁寧に対応したり、千本山保護林において３時間にわたり植物の講義を行った様子が記録されています。

…魚梁瀬を発ったのが午後五時過ぎ、一ノ谷の方に入ってケナシウシコロシ、コジキイチゴ、ハナヤクシソウ等いろいろ採集した。先頭にいた和田君が谷間に降りてモミジバセンダイソウの大きなのを沢山採って来た。先生は大喜びで大きな束を抱えて雀躍した。和田君が「先生御持ちしましょう」というと、如何にも無邪気に、「これは大切だから人には頼まれん」と大切に御自身で抱えて西ノ川事業所まで持ち帰られました。午後七時すぎ西ノ川事業所着、大勢で賑やかな夕食を済ますと、先生は直ちに腊葉にとりかかられる。腊葉の真最中に誰や彼やが標本を持って行って御尋ねすると、喜んで一々丁寧に教えてくださる。大抵の人だと仕事が済むまで待てと気持悪く言うであろうが、先生は却って喜んで一々区別まで言って下さる。それで御自分の腊葉の終るのが午後十一時を過ぎ十二時というふうで全く恐縮してしまう。

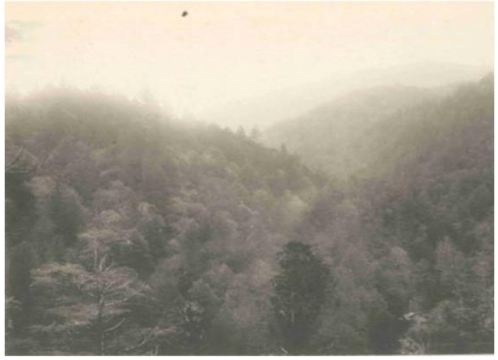
高知林友　第172号「牧野博士にお伴して」より（以下、同じ）

折柄、森林主事教習生の実習中…（中略）…講話をとお願いしたところ、早速御快諾されて、林冠を漏れる日射を物ともせず、三時間余りを立ったまま有益なお話をされた。

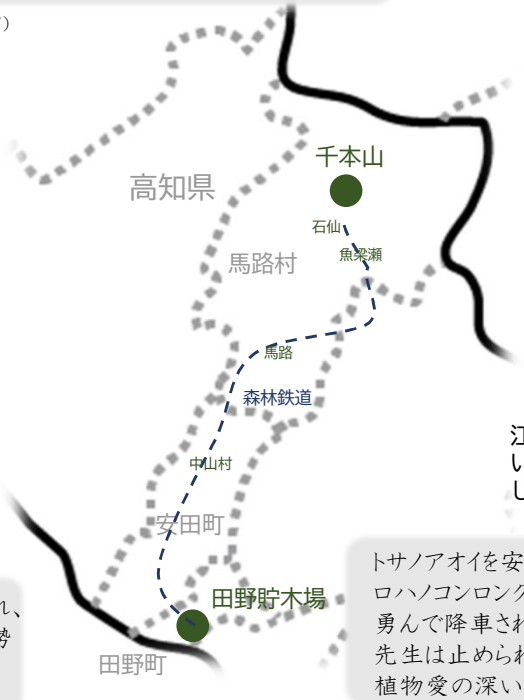
千本山保護林

江戸時代にお留め山として伐採が禁止されていたため、当時からヤナセスギの巨木が林立していました。

魚梁瀬の国有林（一ノ谷）



魚梁瀬は高知営林局管内の美林とされており、当時、峰筋にはスギ、中腹以下にはモミ・ツガの大木が密生していたと記録されています。



田野貯木場には馬路の花田署長が出迎えられ、野根・奈半利・安芸営林署員等十四名の大勢となり、トガサワラの材を見、ホソイの区別やオオユウガギクの区別を教わり…

トサノアオイを安田にて採取、途上中山村で花田署長がヒロハノコンロンクワのある事を談すと、先生は非常に喜ばれ、勇んで降車され採取された。私がもっと沢山採ろうとすると、先生は止められて「これはよいのだから後に残して置こう」と植物愛の深いお心で言われた。

田野貯木場

魚梁瀬とを結ぶ森林鉄道の起点の地でもあり、田野の中心街を挟み、北側には丸太、南側には製材と木炭を貯蔵していました。木材は海運で阪神方面などに出荷されていました。
牧野博士が見た「トガサワラ」は、魚梁瀬と紀伊半島の大台ヶ原山系にのみ自生する日本固有の木で、当局では、管内の３箇所のトガサワラ林を保護林に指定し、大切に保護しています。

森林鉄道

牧野博士が乗った森林鉄道は、当時、田野貯木場と魚梁瀬の石仙土場間約42kmを結んでいました。最盛期、当局管内には、森林鉄道（簡易な軌道を含む）が740kmにわたり敷設され、木材の運搬など活躍していました。

馬路官行製材所

牧野博士が昼食を取った馬路には、明治40年に馬路営林署が経営する製材所が開設され、板類や小角材などを生産していました。四国の製材所としては初めて蒸気機関を動力とし、屑木や鋸屑などを燃料に使っていたようです。

※1　魚梁瀬営林署：現在の安芸森林管理署の前身。馬路村魚梁瀬地域を管轄していました。
※　本紙の写真は、四国森林管理局が所蔵する林業遺産「大正・昭和初期の林業関係写真」にあるものです。当時の林業活動の様子をうかがい知ることができます。牧野博士が訪れた際に撮られたものではありません（主に大正期、博士訪問の10～20年程度前の様子と推定。）が、牧野博士が訪れた場所の写真も残されています。
【参考文献】高知営林局史（1972）、高知林友第172号（昭和９年10月号）　旧字体は新字体に、旧仮名遣いは現代仮名遣いにしております。

牧野富太郎が歩いた「国有林」～白髪山編～

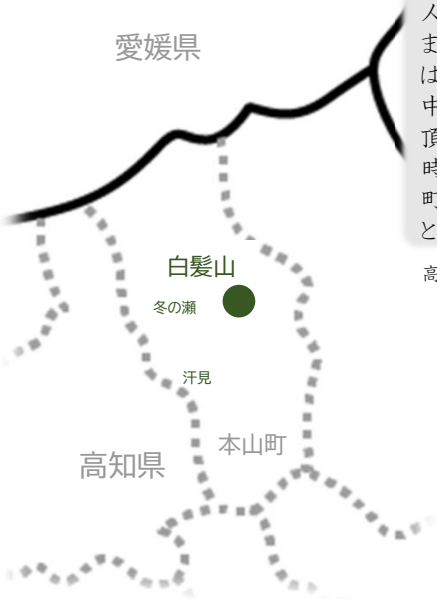
牧野富太郎博士は昭和９年８月８日から10日まで、本山営林署※1管内で植物の採取指導を行い、「白髪山保護林」などを訪問しました。「高知林友」には、汗見川畔を森林鉄道のガソリン機関車で登り、本山営林署の事業所に宿泊、翌日には白髪山保護林を経て、白髪山に登山した様子が記録されています。

白髪山保護林

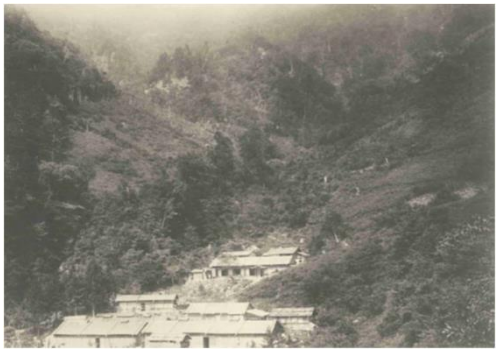
白髪山保護林は、江戸時代までの天然ヒノキの利用の歴史を経てなお残る美林として、大正4年10月に、保護林制度に基づく学術参考保護林に指定されました。

八月八日、本山に着いたのが午前十時半、昼食後汗見川畔をガソリン機関車にて登り冬ノ瀬下車、途中採集しつつ白髪事業所に午後五時過ぎ着いた。
翌九日白髪頂上へと早朝出発し、途中ススダケの区別特徴を教わり、時々先生独特の生物論的人生観を拝聴し、常にはきつい急坂をも打忘れてしまう。今日も随分難行程なので少くとも正午までには頂上に登っていなくてはならないのに、保護林の中腹当たりで昼食となる。やむなく急速力を出して頂上を極め北面を下り冬ノ瀬に着いたのが午後五時、それより強雨の中を下って午後七時過ぎ本山町に着き、今度の旅行の最後の一夜を明かすこととなりました。

高知林友　第172号「牧野博士にお伴して」より



白髪山作業所



当時の営林署の山仕事の拠点。相当数の作業員を宿泊、共同生活させながら、伐採や造林作業が行われていたようです。
上段は事務所及び所員宿舎、下段は人夫小屋と物品供給店だったそうです。

汗見土場

白髪山作業所との間には軌道が通じ、そこから運ばれてきた丸太や木炭を収容していました。丸太はこの下流から吉野川を流送（丸太を1本ずつ。途中からは筏に組み直し）、徳島市に搬出。さらに阪神市場に出荷されていました。

当時の山仕事の様子

当時、チェーンソーは無く、人力での伐採が行われていました。写真はケヤキを「三ツ紐伐り」という方法で伐採している様子です。
（現・高知県本山町　龍王山国有林）

伐採すると、枝や根張りなどを斧で取り払い、「杣角」として搬出しました。
（現・高知県本山町　龍王山国有林）

燃料が薪炭だった時代です。雑木や枝などは、山で木炭に加工され、出荷されました。
（現・高知県津野町　大古味山国有林）

※1　本山営林署：現在の嶺北森林管理署の前身。
※　本紙の写真は、四国森林管理局が所蔵する林業遺産「大正・昭和初期の林業関係写真」にあるものです。当時の林業活動の様子をうかがい知ることができます。牧野博士が訪れた際に撮られたものではありません（主に大正期、博士訪問の10～20年程度前の様子と推定。）が、牧野博士が訪れた場所の写真も残されています。
【参考文献】高知営林局史（1972）、高知林友第172号（昭和９年10月号）　旧字体は新字体に、旧仮名遣いは現代仮名遣いにしております。

牧野富太郎が歩いた「国有林」のいま

今から約９０年前に牧野富太郎博士が歩いた「千本山」と「白髪山」は、「保護林（希少個体群保護林）」として設定し、管理を行っています。

千本山保護林
（千本山天然ヤナセスギ（遺伝資源）希少個体群保護林等）

千本山天然ヤナセスギ（遺伝資源）希少個体群保護林等への
ルートや詳細はこちら

江戸時代から留山として伐採が制限され、樹齢200年から300年といわれるヤナセスギが、1,000本以上も林立し、スギの大径材が天に向かってまっすぐにそびえる様子は、さながら大聖堂に入ったような荘厳な雰囲気を漂わせています。

「鉢巻き落とし」
鉢巻きが落ちるほど上を向かないと木の頂上が見えないことからこの名前がついたと言われています。

「千本山橋の大杉」
「森の巨人たち100選」にも選ばれています。幹周り680cm、樹高は54m。

白髪山保護林
（白髪山天然ヒノキ（遺伝資源）希少個体群保護林）

白髪山天然ヒノキ（遺伝資源）希少個体群保護林への
ルートや詳細はこちら

白髪山は蛇紋岩から成る特殊な地質のため広葉樹が発達せず、天然ヒノキが多く自生しています。
最も有名なヒノキ林は、山頂付近の白骨林で、立ち枯れした数千本の白骨林が自然の厳しさを感じさせてくれます。
また、八反奈路と呼ばれる場所では、ヒノキの巨木が点在し、ヒノキの根が「たこ足状」に広がった「根下がりヒノキ」を見ることができます。

なお、白髪山は平成29年５月に林業遺産にも認定されています。

山頂付近の白骨林

入林される皆様への注意事項

登山は自己責任です。天候や登山情報を確認し、十分な装備で入山してください。
また、ご家族へ行き先を告げるとともに、登山目的地を管轄する警察署等へ登山計画書を提出してください。
国有林に入林する際には、以下の事項について注意してください。
①ゴミは持ち帰りましょう。
②草木やキノコなどを採らないでください。
③タバコなど火の取扱いには十分注意してください。
④自然保護などのために立入禁止になっている箇所へは入らないでください。
⑤枯木や枯れ枝は危険ですので、近寄らないでください。
⑥林道は未舗装箇所が多数あります。通行の際はご注意ください。

編集・発行　　林野庁四国森林管理局

〒780-8528　高知県高知市丸ノ内１－３－３０
電話　０８８－８２１－２２１０（代表）
https://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/index.html